特別寄稿

佐伯と国木田独歩（一）

賛助会員　山内武麒

序

明治二十六年九月三十日に佐伯に来て、翌二十七年の八月一日に佐伯を去った、国木田独歩の佐伯での生活ぶり、もろの考え方などを調べ、特に自然讃美者であった独歩と、佐伯の自然との関連、その結びつきについて、考えてみたいと思う。

そのためには、独歩が書いた「欺かざるの記」の佐伯に居た部分について、よく読み調べるのが、最もよいのではないかと考える。

「欺かざるの記」は、独歩の心情を忌憚なく吐露し、偽らざる記録である。独歩の作品、殊に佐伯を舞台とした作品には、この「欺かざるの記」と関連するものもある。「欺かざるの記」を読んで調べ、併せて他の作品をも参考にして、佐伯に居た時分に於ける独歩の人柄を考えてみたいと思う。

独歩が、明治の文豪としてその名声を博したその文学の、素地を作った一つに、佐伯に於ける彼の生活があったと言っても、決して過言ではあるまい。殊に佐伯の自然との結びつきは、独歩の美的情操を強く育てあげたことは事実である。独歩は、こよなく自然を愛し、自然の深奥を究めんと、自然の中に没入して行く自然讃美者であった。若い日の頃からワーズワースの詩を愛読し、ワーズワースの詩の情景を、佐伯の天地自然の中に再現して楽しんでいた。

独歩はまた熱心な基督教信者であった。深い信仰によって、人生のシンセリテイを把え、神に近づかんと祈念した。この過程にも自然の中に没入して行った素因があったと推察出来る。

「欺かざるの記」を主材として書き、雑誌「明星」に明治三十四年九月から三回にわたって連載された、小品「独語」の第二節の初めに、

これ彼が田舎教師として約一年間、豊後国佐伯町に滞在せし時の日記なり。則ち二十六年九月三十日より二十七年八月一日に至るまで、人の子を教えつつも常に自ら学ぶ処あり、苦しみつつ悶えつつ、又自然の特殊なる恩寵を得て限りなき慰藉を得たる、彼が今日までの生涯に於て尤も幸福なりし時の日記なり。

と書いてある。

佐伯に居た時の「欺かざるの記」を中心に、他の作品も出来るだけ多く取り入れて、国木田独歩の佐伯に於ける生活を、主題として書いてみたいと思う。

参考書は、学習研究社発行の「定本　国木田独歩全集」に據る。

一

先ず、独歩が佐伯へ鶴谷学館の教師として来た、経緯から書き初めよう。

明治十八年七月に、山口県の山口中学校の入学試験に合格して入学した独歩は、二十年三月に、中学校の学制

改革によって、やむなく退学した。前年この中学校を退学していた級友の今井忠治からのすすめにより、両親の承諾を得て、四月に上京した。

翌二十一年五月に、東京専門学校（早稲田大学の前身）の英学部に入学した。学生時代から文学を志し、校友雑誌や同人雑誌などに投書していた。二十四年一月に、東京麹町区一番町教会で、牧師植村正久の手によって洗礼を受けクリスチャンとなった。同年の三月、都合によって専門学校を退学し、五月の初め、両親のいる山口県柳井に帰った。すぐ徴兵検査を受けたが不合格であった。其の後、郷里に居て私塾など開いて見たが思わしくなかった。二十五年の六月に弟收二と一緒に上京した。收二は東京専門学校に入学したが、独歩には別に仕事がなく、雑誌者の下働きなどしつつ、青年文学会に出席して文学活動は続けていた。どうしても定職につかねばと、新聞記者になる決意をして、二十六年二月、金森通倫を訪ねて、自由社への入社を頼んだ。ようやく入社することが出来たが、この自由社の勤務は安定せず、四月には自由社経営難のため、解雇を申し渡された。食うために入社した自由社は、月給僅か三円であったという。しかも入社して二か月余りで罷めさせられ、月給も一度貰っただけであったと言う。これで職を失ってしまった。

同志と協力して作っていた同人雑誌「青年文学」も廃刊のやむなきにいたり、仕方なく英文学書の翻訳などしていたが、たいした収入にならない。苦しい生活を余儀なくされるようになった。

八月になって友人の中桐確太郎から、福島民報社に就職の口があるから来ないかとの通知があった。早速、二十四年頃面識を得て、時々出入りしていた徳富蘇峰にこのことを相談すると、新聞記者になりたいと思うなら、一日も早く地方へ行けと勧められた。しかし、東京を離れるのがいやだったのか、この勧誘を断った。

ところが、月末近くなって、郷里の父から免職（父は裁判所に勤務し、判事補までなっていた）となったので、来月から送金は出来ないと言ってきた。いよいよ困り果て、仕方なく徳富蘇峰を訪ねた。

明治二十六年八月二十九日の「欺かざるの記」に、

午前徳富猪一郎氏を訪ふ。之れ職業に就き依頼する処あればなり。至急周旋の労をとる可きを諾せらる。

とある。そして九月五日の記に、

民友社に徳富氏を訪問す。大分県に教師として行く可きをすすめらる。矢野文雄氏への推薦状を与えらる。

六日　午前矢野文雄氏を訪ふて教師につき相談する処あり。

十二日　矢野文雄氏に書状を以て大分教師の成否を問合わす。

十四日　昨日矢野文雄氏より返書あり。

十七日　矢野文雄氏に行く。愈々大分に教師として参ることに決す。

二十日　朝徳富猪一郎君を訪ふ。謹めて曰く、他人と衝突する勿れ、人を凌ぐ勿れと皆な余が今度大分に行き人と交はるに当りて適切の誡なり。吾能く人と衝突すればなり。凌げばなり。

されど徳富君心配し給ふ勿れ。人と衝突せし余は今の余に非ず人を凌ぎし余は恐らく今の者にあらざる也。

衝突は雅量なきの致す処、凌侮は謙遜なきの致す処、共に修業ある者の恥辱とする処なり。

徳富君、余は君が思ふより大なり。余は進歩する霊魂也。

このようにして、独歩は佐伯の鶴谷学館の教師となったのである。蘇峰の推薦と龍溪の取り持ちによって、この職を得たのである。食いつめてどうにもならなかった独歩には、この二人は救いの神であったのである。

気性の強い独歩のことであるから、生活のためとは言いながら、きっと心に期するものがあって佐伯に来たのに間違いあるまい。

佐伯の鶴谷学館の口が決まった独歩は、九月二十一日、友人や教会の人々からの送別会に出席し、その晩の九時五十分新橋発の夜行列車で東京を離れた。

翌二十二日午後、彦根に下車して、東京専門学校以来の友人大久保余所五郎を訪ねて一泊し、翌二十三日午後大阪へ出て汽船に乗り、翌日夕暮柳井港に到着して帰宅した。

二十五、六日は近郊の以前世話になった家々を廻って挨拶し、二十七日の夜十時、弟の收二を連れて柳井港から乗船し、二十八日朝宇品へ着き、宇品から四国の三津ヶ浜行の汽船に乗り換えて、夜半三津ヶ浜に着、翌二十九日午後乗船して、三十日の正午に佐伯港に着いた。

そして佐伯仲町六八番地富永旅人宿に止宿した。この宿屋は、今のちえの井酒店のところと考えられる。

二（十月の記）

十月一日の記を見ると、独歩は、佐伯に着いた日の九月三十日の午後、すぐ中根彦亂氏を訪ねている。中根氏は当時百九銀行の頭取で、鶴谷学館の経営に参与していた。なお一日の記には、

午前山名、野村、高橋等四氏来訪。午後收二と共に近郊を漫歩し高きに上りて遠望すれば佐伯市眼底にあつまる。

夜少年諸子来訪。其前山中盛太郎氏を訪問す。

とある。山名は山名驥、野村は野村一也、高橋は高橋庸吉の諸子である。山名氏は明治二十五年の七月に、大分の大分県尋常中学校を卒業していた。当時この南郡で同校を卒業した人は、氏が最初であった。（二十五年八月発行の鶴谷叢誌による）　野村氏は当時大分中学生であった。山中盛太郎氏は、百九銀行の取締役をしていて、やはり学館の経営に参与していた。この人は後に佐伯町長となった。

独歩は、早速散歩に出て山に登っている。この山は言うまでもなく城山である。さぞかし佐伯の自然の美しさに心をひかれたことであろう。

二日　午前中根氏を訪ふ不在、蓋し氏と共に毛利氏を訪はんとてなり。坂本永年氏来る、午後三時鶴谷学館に行き幹事の諸氏と学課の事に就き相談する延べり。

中根氏に連れられて、旧藩主であり、鶴谷学館の設立者である毛利高範子爵へ、御挨拶に伺うこと必だったのである。

坂本永年氏は、当時やはり百九銀行の取締役をしていて、鶴谷学館の監事で館長を兼ねていた。

鶴谷学館は、高等補習教育機関とも言うべき私立学校で、英語・数学・漢学・理科・剣道の課目を置いてあったらしい。独歩は学館の教頭で、英語・数学を担当した。漢文と剣道は中島龍一郎、理科は石田豊城が受持った。

中島は当時、時習学館と称する漢学塾を開いており、石田は当時の佐伯高等小学校の校長であった。齢僅か二

十三歳の若僧の独歩が、教頭となり、月給二十五円と、当時佐伯では裁判所の判事と同額の高給取りであった。

ちなみに鶴谷学館は、明治二十三年の創設（鶴谷叢誌第一号による）で、二十九年頃閉鎖されたらしい。場所は、新屋敷の今佐伯信用金庫のある付近で、昔、絲繰工場を改築して使用したらしい。

四日　秋の雨　蕭々として物寂し。

昨日始めて学舎に出席し二十余名の生徒に向い、開講並に初対面の詞を述ぶ、日課を定めて帰る。

吾をして少年を愛せしめよ。ア、吾をして少年をあやまらしむる勿れ、

薄暮、弟と共に市街を散歩し郊外に出で、暗夜をたどりて城山の後に出づ。弟の為めに時代をはなれ、境遇をはなれて一段高き人間の真生命のあるべきを語る。自然の児として直ちに神に面すべき消息を伝ふ。「三百年の後の人の為めに書す」の意味を語る。（以下略）

「吾をして少年を愛せしめよ、ア、吾をして少年をあやまらしむる勿れ」と、教師となった心構えを記して、自ら警っている。食いつめて都落ちをした独歩には、田舎に来てやるせない気持もあったであろうが、教師となったからには、教師として正しく誠実を尽くそうと、心に期するものがあったにちがいない。

「弟の為めに時代をはなれ、境遇をはなれて一段高き人間の真生命のある可きを語る」とあるが、苦しみ多い現実から抜け出して、一段高いところに理想を求めようとする若者の気持をよく表わしている。

五日　雨降ること蕭々たり

昨日より初めて授業す、三時半（午後）より下級生の為めにナショナル読本二の巻を授く　四時半よりリーディングを授く。午後八時半より代数学を授く、九時半より上級生の為めにスチントン萬国史を講ず、以て日課を了はる。

以て日課を了はる、然り　パンの為めに働きたる日課は了はり畢。されど果して吾が天職に尽すべき日課は了はりたるか。

嗚呼　天職！天職！詩人としての天職は難き哉、されど吾詩人として存在し詩人として天職を完ふする能はずんば、寧ろ此の生命を詛ふなり。嗚呼　日々夜々何をか求ひ何をか求むる。何の楽ぞ、何の喜ぞ。人生を思ひ自然を思ひ、人情を思ひ、神聖を思ひ、神の愛を思ふ能ざる生命は詛ふ可きかな。（以下略）

鶴谷学館は、授業が午後三時半から五時半、八時半から十時半までの二部授業で、前半は下級生、後半は上級生に授業していた。独歩が佐伯に赴任して間もない十月六日付で、友人の大久保余所五郎に宛てて出した手紙に、鶴谷学館のことを次のように記してある。

生徒の気風は未だ十分知れず候へ共、一寸見たる処にては昂々然たる大志ある者も見受けず　生徒中長年者の大半は職業を有し　或は裁判所に出るとか　或は銀行に出るとかにて　純然たる学生は少数に御座候

授業は午後三時半より五時半までと、午後八時半より始めて十時半までとの四時間に候　講義はナショナル、スチントン万国史、ヘスチング伝、其他文典・読方、別に代数学を受け持ち、一週二十三時間計りの労

働に御座候

とある。上級生の大半は職業に就いていたので、独歩より年上のものもかなりあっただであろう。これで学館の様子がよくわかる。

独歩は、詩人として生き、詩人として天職を完うしようとする生来の希望は、まことに旺盛なものであった。

七日　六日は去りて七日は来り、七日も亦将に去らんとす。

本日午前収二と共に郊外に出て金比羅山に登る。此の山は佐伯町の南に当りて兀立する山なり。眺望佳なり。

金比羅山とは、久部の煙草山である。ひまさえあれば、あちこちの山野を跋渉した独歩には、先ず手初めというところであろう。

独歩兄弟は、六日に芽島の月本旅人宿へ転宿した。今の幹線道路は、昔は川であった。広小路から芽島に渡るのに、諸木橋という橋があった。この宿屋は、その諸木橋の橋元にあった。今はその面影は全くない。（つづく）

紹介

「佐伯と国木田独歩」について

編集子

今から八十五年前の明治二十六年の夏、独歩はこの草深い田舎町の佐伯にやって来て、正味は僅か十か月しか居なかったのに、まことに巨きな足跡を佐伯に残した。

うちめぐらす佐伯の山々、清らかに流れる番匠川、そして桃源境のようなあちこちの村里、それらを、詩情豊かな数々の名文章で、広く天下に紹介した。そして今も今後も佐伯の良さを変らずに賛美しつづけるものが、外にあるであろうか。

しかし、独歩についての皆さんの理解は、あるいは観念的なものではあるまいか。明治の中葉の社会背景、独歩の文学やその私生活に至るまで、私どもはどれだけの認識をもっているだろうか。

わが佐伯史談会は、多年独歩の文学を愛読し、その生活の足跡をたどったりした。また先年、佐伯ロータリークラブは巨費を投じて、見事な「城山」の詩碑を三の丸上段に建設した。そして去る六月二十三日の「独歩忌」には、とだえようとしていた「佐伯独歩会」が再興され、その組織は成長・充実の一途をたどっている。まさに上げ潮ムードである。

あたかもよし、この時に、佐伯に於ける独歩研究の第一人者、山内武麒氏が多年のうん蓄を傾けて、独歩に関する文献を集め、資料を詳細に究めつくし、ここにまとめて「佐伯と国木田独歩」と題して寄稿して下さることとなった。何たる仕合わせであろう。

原稿はすでに大半は頂いているが、尚進行中で、「歌かさるの記」をはじめとし、「源おじ」、「春の鳥」、「鹿狩」、「豊後の国佐伯」など、すべての作品を精密に考証して、佐伯に於ける独歩研究の、決定的なものとなりそうである。私は大きな期待をもって、この「佐伯史談」誌上に連載をつづけようとしている。少なくとも向こう三年はつづくことになろう。

「佐伯と国木田独歩」というタイトルは、どこかで見かけたとお思いの方もあろう。それは数年前出版発行された「佐伯市史」の中、「佐伯人物志」の次に、この標